

稲荷塚古墳(嵐山町) きれいに積まれたアーチ状石室

なにやら右手に小高い山が！



明らかに古墳のようである







正面に廻ります





稻荷塚古墳

文化財
大塚
しほり

玄室入り口(施錠されている)



積み石が見える



胴張りのある横穴式石室で渡来系の手によると言われる

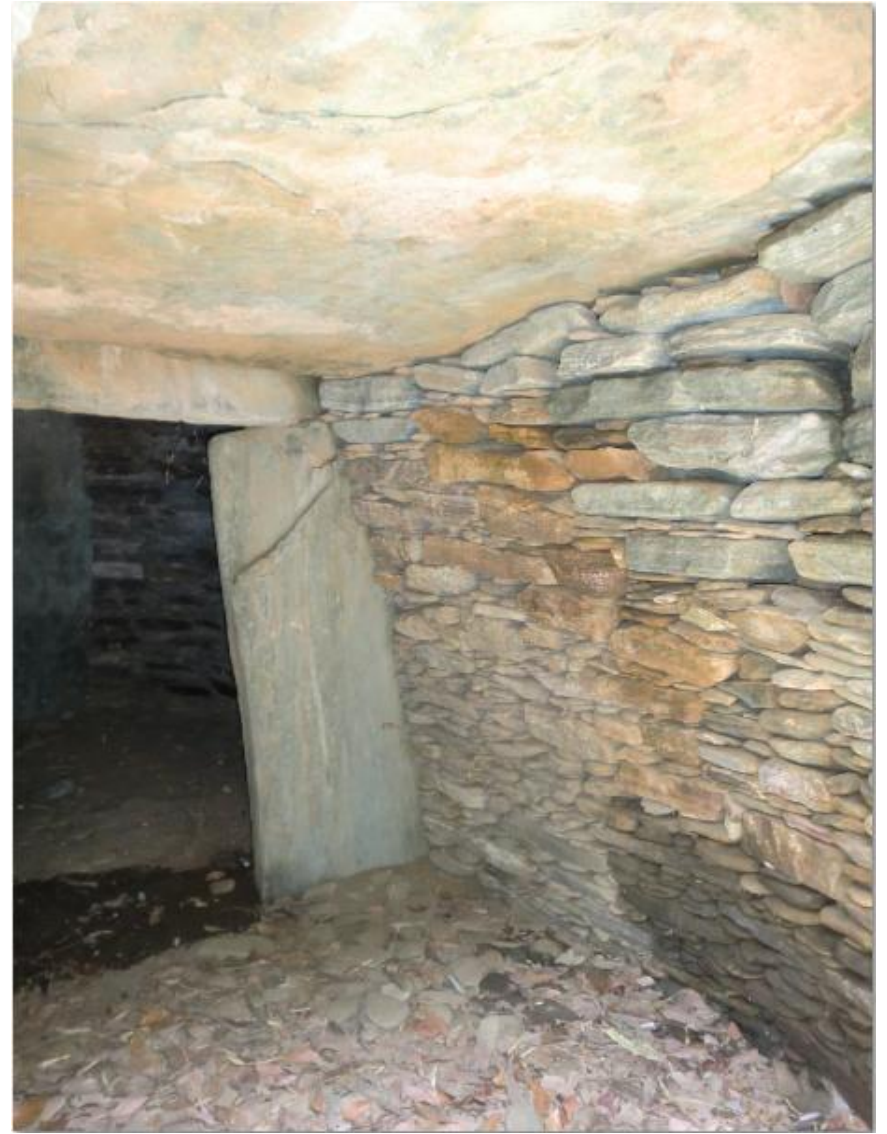


石室の横壁がカーブを描いている(中間で膨らんだ形)









天井に板石が大きい



平成二年に設置した説明板らしいが字が読めない(このくらいのメンテはやってほしい)





足をのばせば

高山重忠の居館のあった菅谷館、その跡に建った県立歴史資料館、木曾義仲の父・常刀先生源義賢の墓とその館である大蔵館跡、義仲が産湯をつかったという清水跡のある鎌形八幡神社、嵐山渓谷、鎌倉街道跡など。

品としては、人物埴輪・馬形埴輪・直刀などがあつたという。ただし、この稲荷塚は以前から開口していて、ここからの副葬品を特定することはできない。

石室構造と周辺の古墳からの推測で七世紀後半頃の築造とされている。

ここは都幾川と槻川とが合流する所。これは、この稲荷塚古墳の立地となったことと何か関係あるのだろうか。

今は、中学校の運動場の隣となつて、始終生徒達の活発な声が聞こえてきて、古墳の主も楽しそう。

若いのはいつも元気がいいな、でも、俺達の、小さな石を組み合わせ、組み合わせてこの古墳をつくり上げた「きちょうめんさ」は、いつの時代になつてもいいものだと思うよ。受け継いでほしいんだよね——。

きれいに積まれたアーチ状石室

稲荷塚古墳 (嵐山町)

◎データ

所在 比企郡嵐山町菅谷

形状 高さ4m、長径36m、短径27mの円墳

年代 7世紀後半

行き方 東武東上線「武蔵嵐山」駅下車、徒歩約15分



石室が開口して中を覗けるが、緑泥片岩の大きいや小さいのをきれいに小口積み積み上げたアーチ状の石室だ。

この石室は玄室と前室から成り、ここへ入るまでに入口から羨道というものがあつたはずだが、ここでは破壊されていて、おそらく玄室と同じようにつくられていたのではないかと想像するしかない。しかし、残された玄室だけを見ても、これをつくった古代の人々の、きちょうめんさと技術をうかがい知ることができる。

石室の横壁のカーブを描いているところを見ておきたい。比企地方に比較的多い「胴張りのある横穴式石室」である。基本的には直線である側壁が、中間で膨らんだ形でカーブしている。

このかたちについては、渡来人である壬生吉志氏の一族が武蔵国に来て広めたものだという説もある。

昭和二六年に発行された「埼玉縣史」によると、この辺りの古墳の数は現存するものだけでも二〇―三〇ありとあり、出土

豆辞典 刀と剣 片刃のものを刀、両刃のものを剣と区別している。古墳の副葬品として前期は剣のほうが多い。